



北海道内の有志が研究会を設立

日本の乳牛の5割強、肉用牛の2割が飼養されている「酪農・畜産王国」の北海道で、アニマルウェルフェア（家畜福祉）に適った畜産のあり方について考え、課題の解決に向けた提案もしていこう。5月10日、そんな思いを抱く道内の酪農家や研究者、獣医師、消費者グループ・動物保護団体のメンバーら10数人が「北海道・農業と動物福祉の研究会」を設立した。

滝川康治（「北海道・農業と動物福祉の研究会」事務局）

アニマルウェルフェアに適った畜産を提案しよう



「家畜福祉」の認知度を高めたい

1970年代以降、酪農・畜産の規模拡大が急速に進んだ。その結果、多くの畜産製品が食卓に上り、物質的な充足を与える役割を果たした反面、生産性を高めることに偏重した家畜改良や効率優先の飼養管理などによって、畜産動物に苦痛を強いているのが実態である。

OIE（世界動物保健機関）による世界家畜福祉基準の作成作業が進んでいる。国内でも農林水産省が「アニマルウェルフェアの考え方に対応する飼養管理指針」を策定したり、公益社団法人・畜産技術協会が家畜福祉の評価法をまとめるなどの動きがある（会報「ALIVE」108号、日本獣医生命科学大学名誉教授（農業経済学）の松木洋一さんの報告を参照）。

しかし、アニマルウェルフェアや家畜福祉といった言葉の認知度はきわめて低く、関係者以外には国内外の基準づくりの動きも伝わっていない。そんな状況に一石を投じ、生産農家や加工、流通、販売、消費者などが一体となって課題の解決に向けて学ぶなかで、今後の方向性について提案していくことを目的に、有志による研究会を立ち上げた。

活動の手始めは「アニマルウェルフェア畜産の可能性を探る」をテーマに札幌市内で開催した設立記念のフォーラム。道内各地から生産農家や放牧酪農を志す

若者、加工・流通関係者、畜産関係の公務員、研究者、消費者、ジャーナリスト、学生ら90人あまりが参加し、用意した資料が足りなくなるほどの盛況だった。



畜産動物に心を寄り添わせて生理や習性に適う飼養方法を

研究会の発起人を代表して、酪農学園大学教授（農業経済学）の荒木和秋さんは、「畜産物を工業製品として捉え、消費者も『安ければいい』と考えてきた結果、BSE（狂牛病）や口蹄疫、鳥インフルエンザ、豚流行性下痢などが発生し、工業的な畜産が課題に直面している」

と前置きして、北海道の牛たちが置かれている過酷な実態を紹介。乳牛の能力を調べる機関のレポートによると、30万頭の検定対象牛の3分の1が毎年淘汰されるという。

「2回出産して、平均寿命は4歳。本来、10歳以上生きられる牛が短命に終わっており、人間社会の過労死と通じるものがある」（荒木さん）

こうした、いびつな畜産のあり方を変えていくために、研究会の活動への参加を呼びかけた。

帯広畜産大学講師で当研究会共同代表の瀬尾哲也さんは、「アニマルウェルフェアがめざす方向」をテーマに基調講演を行なった。学生時代に動物行動学を学び、ずっと牛たちを観察してきた瀬尾さんは、畜産技術協会のアニマ

ルウェルフェア評価法の作成にも関わり、日本では初めて乳牛の評価法をまとめている。

「自分の心を家畜に寄り添わせていくことがアニマルウェルフェアの根本だと思えます」

と強調。繋ぎ飼いの牛舎で膝が腫れている、犬が座るような不自然な姿勢、削蹄されていない……といった、牛たちが置かれている実態をスライドで紹介した。

「哺乳に10分ほどかけると牛は満足する。バケツでがぶ飲みさせるのではなく、哺乳瓶を使って吸わせてほしい。単に栄養を与えるのではなく、牛の行動を理解してほしい」と、動物の生理や習性に適った飼育方法の大切さを説く。

道内の屠畜場では、多くの家畜が屠殺前日に搬入されるが、飲用水設備はほとんど整備されていない。牛たちは、喉の渇きをいやそうと体を洗うホースから出た水を舐めたりする。「飲水の欲求を満たすことが必要」と、瀬尾さんが力を込めた。

「アニマルウェルフェア評価法」の条件をクリアした牛乳も誕生

家畜福祉をめぐる「5つの自由」の原則をはじめ、鶏のケージ飼いや（出産後を除く）豚の分娩ストールの禁止などを除く）豚の分婉ストールの禁止などEU（欧州連合）の家畜福祉事情も紹介。独自のラベルを貼ってアニマルウェルフェア畜産製品を認証する欧米の状

況に言及した。
国内でも認証システムを視野に入れた試みが始まっている。

北海道のよつば乳業は今年4月、十勝地方の5戸の酪農家が出荷した生乳を加工し、東京などの共同購入グループに供給をスタート。①放牧生産者指定②ノンホモ牛乳③非遺伝子組み換え飼料の使用——に加え、畜産技術協会のアニマルウェルフェア評価法にクリアすることが出荷の条件だ。瀬尾さんは、酪農家と乳業会社との橋渡し役を担ってきた。

「私たちがめざすのは、人間が食べられない草などを与え、動物たちに乳や肉、卵へと替えてもらう——という畜産の原点に戻していくことです。持続性をキーワードに、健康的にやさしく、長く飼ってあげる。環境にもあまり負担をかけず、家畜も地域も健全に、と。大きな視点で、みんなに愛される畜産のあり方を問い直していきたい」

と力を込め、明日への希望に向けた決意を示していた。

ストレスのない環境で営む 小規模酪農と乳製品づくり

現場報告では、旭川市内の「クリーマリー農夢」代表の佐竹秀樹さんが「ストレスのない環境で牛を飼う」をテーマに体験談を語った。

学生時代、集約畜産に警鐘を鳴らしたルース・ハリソン氏の著書『アニマル・マシーン』を読み、「繋ぎ飼いと太陽の

光を浴びた牛の乳は違う」という記述に共感した。卒業後はオーストラリアで2年間の牧場実習。ニコニコしながら毎日、牛にあいさつしていた牧場主は佐竹さんに、「牛に話しかけてごらん」と勧めた。

帰国後、製菓会社に勤めてハーブ裁



(写真上)札幌市内で開催した設立記念のフォーラムの様子

(写真右下)帯広畜産大学講師で当研究会共同代表の瀬尾哲也さん

(写真左下)「クリーマリー農夢」代表の佐竹秀樹さん



りし、夏場は集約放牧を行なう。太陽の光が入るよう全面に透明の亚克力板を貼り、採光や換気に工夫を重ねた。夏場は牧場内の好きなどところで分娩。生まれた子牛は必ず母牛と一緒にする。

「以前は『アニマルウェルフェア』の言葉を知らなかったけれど、『ウェルフェア』心地よい状態」と分かり、これまで自分がめざしてきた酪農と理解できました(佐竹さん)

ホームページや農場を訪れる人たちとの会話などを通して、家畜福祉の普及に努めてきた。「酪農教育ファーム」の認証を受け、搾乳体験なども積極的に受け入れられている。搾乳時には温水シャワーで乳頭を洗浄し、衛生管理に心を配る。いつも生菌数100個未満/mlという乳質の良さが光る。大企業がやれないことに着目し、家畜福祉を実践するなかで、生菌数のきわめて少ない良質な生乳を実現している。

「家畜を粗末に扱わないことの大切さを消費者の皆さんにも知ってほしい。これからは、草地酪農の充実や有機酪農への転換、コジェネによるエネルギーの自給も進めていきたい」と報告を締めくくった。

具体的な事例を紹介した二人に対し、参加者からは質問が相次ぎ、研究会の今後の活動に手応えを感じさせる設立記念フォーラムだった。

研究会では今後、家畜福祉の推進に向けて、①公開学習会や見学会、フォーラムなどの開催②啓発・普及などの活動③関係機関への提案や要請——を柱に取り組んでいくことにしている。

2014年度の活動予定

☆「クリーマリー農夢」の見学会(6月7日)

☆公開学習会「欧州のアニマルウェルフェア製品認証システムに学ぶ」(講師・日本獣医生命科学大学教授の植木(永松)美希さん)(8月1日)

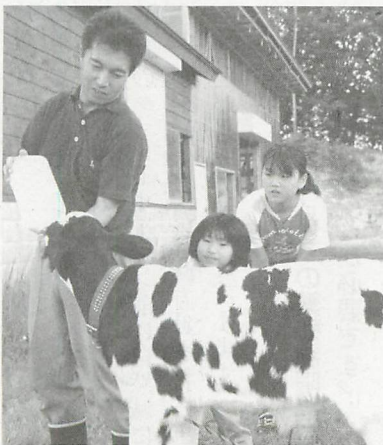
☆同「屠畜場におけるアニマルウェルフェア」(講師・北海道帯広食肉衛生検査所専門員の奥野尚志さん)(9月)

☆米村牧場(酪農&チーズ製造十放牧養豚・江別市)見学会(10月)

☆第2回フォーラム(15年1月)

※「クリーマリー農夢」のHP

www.7a.biglobe.ne.jp/~creamery-gnome/



「クリーマリー農夢」の酪農体験